

「2番、セカンド、新井」

第2代センター長 (1992-1996年)
理工学部 知能情報システム学科 新井康平

「2番、セカンド、新井」のアナウンスに送られて情報処理センターの打席に入った。

1番バッターがヒットで出塁していたので、2番バッターは何とか走者をホームに迎え入れようとヒットを狙った。好球必打で打席に入ったが、狙い球は絞っていた。

情報教育である。相手のピッチャーは入れ替わり立ち替わり交替する。そのたびに球種が変わる。速球(今日中に資料を持って説明にくるようにとの要求)もあれば、くせ球(わけの判らないことを聞いてくる場合)もあった。しかし、狙い球は情報教育という「直球」に絞っていた。

折りしも全学教育センターの立ち上がる時期であり、その第9部会、「情報処理部会」の初代部会長として情報リテラシー基礎教育の定義からその方法まで何から何まで手探りで作り出す必要があった。

2代目のプレーイングマネージャーは監督として、ハードウェア、ソフトウェアの充実を図る必要があった。情報処理センターチームは観客の入場料で経営している。観客の喜ぶ、質の高い試合(ソフトウェアの充実)はもちろんのこと、スタジアムの近代化(フレーム型の計算機の集中管理型システムから複数のワークステーションからなる分散型システムへ:システムリブレース、また、学内外の情報通信需要の増大に対応するネットワークの充実:学内LAN、学術情報ネットワークの高速化に心を砕いた)も必要であった。とりわけ、ATMの導入は記憶に新しい。「思い切って導入してよかった」と思っている。今後、学内外一斉講義や仮想現実を用いた新しい教育形態を実現するために有効であると思っている。また、情報教育のハードウェア、ソフトウェアの充実を図った。まず、手始めに情報処理演習棟、並びに、設備の開発整備を行った。その後、科目選択支援システムなる概算要求を思い立ち、予算がつき、開発整備した。そして、SCSである。宇宙開発事業団に勤務経験のある私は「通信衛星を介した遠隔授業」には初めから興味があった。導入に戸惑いはなかった。

さらに、社会に開かれた大学を目指し、周辺大学との協力、地方自治体との協力、関係省庁との協力、国内外の情報関連機関との協力にも努めた。その一貫として周辺地域住民を対象とした、情報処理教育講座を実施したり、科学技術庁の省際ネットワーク、郵政省のギガビットネットワーク等の構想段階に協力したり、佐賀県の情報基盤整備計画の策定にお手伝いしたりもした。

さて、打撃成績は、ホームラン(省令組織になること)は打てなかったが、ヒットは何本か打てたと思っている。3番バッター(現センター長)がスラッガーであるので「ホームラン(学術情報処理センター)」が期待できそうである。4打席ともに「3番バッターにつなぐバッティング」ができたと自負している。

2期4年間はこうして瞬く間に過ぎた。観客の皆様、我がチーム「情報処理センター」のメンバーに支えられて何とかプレーイングマネージャーを勤められた。本紙面をお借りしてご支援戴いた皆様に深謝の意を表しますとともに、今後とも我がチームを温かく見守って戴ければ幸甚に存じます。